様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　６ 月 ３０ 日現在

機関番号：１２６０６
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2017
課題番号：１６Ｋ１６７４３

研究課題名（和文）山岸章二のアーカイブ作成：写真プロデューサー山岸章二が果たした業績の研究と記録化

研究課題名（英文）Shoji Yamagishi Archive: Research and documentation of Shoji Yamagishi's achievements

研究代表者
下西　進（SHIMONISHI, Susumu）

東京藝術大学・大学院美術研究科・研究員

研究者番号：１０７６０８１１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、雑誌『カメラ毎日』の編集者として日本の写真表現発展に貢献した山岸章二のアーカイブを作成し、日本の現代写真史を研究するものである。山岸章二の妻であり写真キュレーターの山岸享子氏が東京芸術大学附属図書館に寄贈した書籍資料や山岸章二に関する一次資料（手書きメモ、音声テープ、印刷物等）を中心に山岸の業績を調査した上で、山岸章二と交流があった写真家などに取材を行った。
一次資料はアーカイブ化し、インタビュー取材はオーラル・アーカイブを作成した。これにより、山岸に関する事柄や山岸の人物像などこれまで記録されてこなかった事象が明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
これまで写真家の個別研究や写真史の編纂は進んでいるが、編集者や写真ディレクターといった存在に着目した研究は乏しいのが現状である。
本研究では、編集者であり日本における写真プロデュースの先駆者である山岸章二を取り上げ、山岸旧蔵資料を基に、彼の活動を記録した。また、米国大手の学術書に山岸の活動を広く紹介する記事を執筆した。
これにより、雑誌や写真集の編集者に関する研究が、戦後日本の写真表現の再評価へ繋がると考えられる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is documenting the archive of Shoji Yamagishi who contributed considerably to the development of Japanese photography as an editor of the magazine ''Camera Mainichi''. His widow, Kyoko (Koko) Yamagishi, an independent photography curator donated most of her books to Tokyo University of the Arts' Library in 2015. The research presented here is mainly based on this archive - her books, as well as materials on and by Shoji Yamagishi: handwritten memos, voice recording, printed matter, and an oral archive of interviews with photographers who have worked with Yamagishi, taken in the framework of this research.
In conclusion, this study reveals new historical facts as well as personal insights into Yamagishi's personality and character, which shall help to understand his role for the history of Japanese photography in the second half of the twentieth century.

研究分野：現代写真

キーワード：現代写真　日本写真　写真史　山岸章二　カメラ毎日

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

1960 年代から 1970 年代にかけて、日本は多くの優れた写真家を輩出し、彼らの作品を世界に紹介してきた。また同時期に、世界的に活躍する海外の写真家の作品も日本に多数紹介された。当時、写真作品の発表の場として重要な役割を担っていたのが、雑誌『カメラ毎日』である。

本研究の研究対象となる山岸章二（1928～1979 年）は、編集者として 1960 年代より雑誌『カメラ毎日』（毎日新聞社、1954～1985 年）誌上で数多くの前衛的な写真家たちを紹介し、日本における写真プロデューサーの先駆者となった人物である。山岸は多くの写真家を育て、新しい写真表現を次々とプロデュースしたにもかかわらず、山岸についての先行研究や、その仕事をまとめた資料等は驚くほど少ない。彼が積み重ねた仕事と功績を考えると、その活動について綿密にまとめたアーカイブ資料が存在するべきだが、こうした資料が蓄積されていないのが現状である。

山岸に関する先行研究としては、西井一夫『写真編集者－山岸章二へのオマージュ』（窓社、2002 年）が挙げられる。本書籍は、山岸と共に『カメラ毎日』で編集者として活躍した著者が、山岸の仕事に関することや山岸への思いを綴ったものである。しかしながら、山岸の幅広い仕事をカバーする資料としては詳細に乏しく、山岸と同じ編集者という立場で書かれているため、エッセイに近い内容となっている。また、西井が死の直前に病床で執筆したこともあり、山岸に関する情報が完全に精査されず、基本情報に誤りもある。

2015 年 3 月に、山岸の妻でインディペンデント写真キュレーターの山岸享子（1940～2018 年）が第一線から退き、彼女が所有していた山岸章二・享子の蔵書（以下、山岸旧蔵資料）の大半が東京芸術大学附属図書館に寄贈された。山岸旧蔵資料の多くは、『カメラ毎日』を中心とした雑誌、展覧会カタログ、山岸夫妻と交流があった写真家の写真集等であり、希少価値の高い資料が多数含まれていたことに加え、山岸夫妻宛の作家の署名が記された書籍も存在することから歴史的価値があると判断し、これらを精査することとなった。

なお、報告者は武蔵野美術大学および同大学大学院在学中に山岸享子に指導を受け（1995～2002 年）、その後も深く交流したことが、本研究開始のきっかけとなったことを付記しておく。

２．研究の目的と特色

本研究の目的は、以下の二点である。第一に、1960 年代から 1970 年代にかけて、『カメラ毎日』の編集者として活躍した山岸章二の活動内容を調査し、山岸の仕事をまとめたアーカイブ資料を作成することである。第二に、山岸の人物像や交友関係を調査することで、これまで記録されてこなかった山岸の生き様や基本情報をアップデートし、日本の現代写真史に一時代を築いた山岸と、彼の仕事を支えた人物たちとの繋がりを明らかにすることである。

本研究の特色は、以下の二点にまとめられる。第一に、美術史研究で常套手段となっている作家や作品に関する個別の研究ではなく、一人の写真プロデューサーの積み重ねてきた業績を全体的に俯瞰することで、日本の現代写真史に新たな見解を加えるという点である。山岸章二という人物や『カメラ毎日』という雑誌を軸に据えることで、この時代における「編集者」という立場や写真作品の発信媒体である雑誌の存在が、日本の写真表現が発展する上でいかに重要であったかを立証することとなる。

第二の特色は、山岸章二と交流のあった人物のインタビュー記録をとるという点である。近年、美術史研究の方法の一つとして、紙媒体の資料だけでなく、作家や評論家らに直接インタビューを行い、生の声を記録するオーラル・アーカイブの試みが盛んに行われている。本研究においても、書籍や論文といった資料の乏しい山岸の業績を明らかにする手段として、インタビューという方法を重視している。

なお、山岸の活動の多くは毎日新聞社の社員時代のものであり、当時は編集者と称されていた。しかし、多くの新人を発掘して写真家としてデビューさせ、国際舞台で日本の写真家を紹介するなど、雑誌編集者という領域を越えて幅広く活躍したため、本研究では山岸を「写真プロデューサー」と称している。

３．研究の方法

（１）山岸旧蔵資料の調査研究

山岸旧蔵資料のうち、約 2000 冊の書籍は東京芸術大学附属図書館の協力の下、展覧会図録、写真集、海外の出版物、雑誌等に分類した。また、ここには山岸夫妻へ宛てた日付入りの署名や書簡等を含んだものもあり、署名や私信を分析した上で、山岸夫妻の交友関係を調査した。

（２）山岸章二に関するインタビュー調査

山岸と直接交流のあった人物や、山岸から影響を受けた人物のインタビュー取材を実施した。取材は音声で記録し、撮影が許される場合は映像や写真で記録するなど、山岸の

人物像や交友関係に関するオーラル・ヒストリーを収集した。

（3）一次資料の分析

本研究で調査した書籍資料に加え、山岸の声を記録した音声テープ、山岸自身が撮影したネガフィルム、ポジフィルムなどが一次資料として見つかり、これらを整理・分析した。

寄贈書籍の分類の様子

山岸とアヴェドンが対談した様子を収めた音声テープ 「アベドン写真展 1979.4.5～17 伊勢丹　ティーチ・イン 4.7 会場にて R.Avedon 司会 山岸章二 通訳 村田恵子」

4．研究成果

（1）山岸旧蔵資料の調査と分析

寄贈書籍に関しては、大きく分けて二種の書籍に区分した上で、分析を進めた。

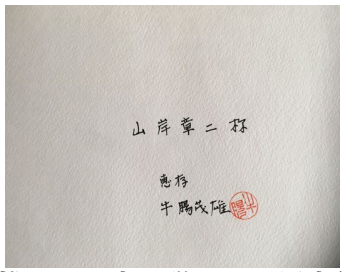
第一の区分は、『カメラ毎日』、『映像の現代』(中央公論社、1971～72 年) シリーズ等、山岸が直接編集や執筆に関わった書籍と、山岸と交流があった人物が山岸に贈った書籍である。特に山岸が編集に関わった 1958 年～1978 年の『カメラ毎日』は、山岸が直接手にした現物であり、読者から編集部宛に届いた書簡や『カメラ毎日』に関する新聞記事が挟み込まれており、これらを整理した上で分析した。

さらに、写真集には作家が山岸に本を贈呈した際の日付や署名が記入されており、これらの事象から山岸と作家が交流を進めた具体的な時期などが分析できた。

第二の区分は、山岸の仕事の一部を引き継いだ妻享子が収集した書籍である。ここには享子が編集や執筆に関わった写真集や雑誌が多く含まれているが、大半は作家から贈られた写真集や享子自身が研究資料として購入した書籍である。これらの資料を分析し、山岸の築いた人脈を基に、享子が日米を中心とした多くの写真家と交流を持ち、山岸の死後に写真キュレーターとしての仕事に従事していった様子が確認出来た。

寄贈書籍には米国の写真家リー・フリードランダー(1934 年～)の初期から近年までの写真集が数多く含まれており、山岸夫妻とフリードランダーが親しく交流し、山岸の死後もフリードランダーと享子が交流を続けていった様子が、写真集に直接書かれた署名や文面から確認できた。この交流によって、フリードランダーの代表作の一つである「桜狩」シリーズが完成度を高めて発表された可能性があることなどが明らかとなった。

このことなどから、1960 年代から 70 年代に山岸によってプロデュースされ、日本の現代写真史上、非常に重要な価値を占める写真家及び写真作品が、今日の写真表現や美術表現にまで様々な形で影響を与え続けている可能性を追うことができた。



牛腸茂雄から山岸へ贈られた写真集に書かれた牛腸の署名

（2）山岸章二に関するインタビュー調査とオーラル・アーカイブの作成

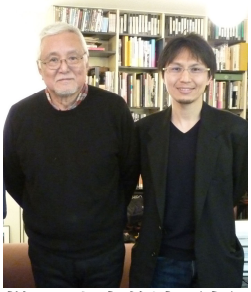
本研究では、山岸章二と直接交流のあった人物や、山岸から影響を受けた人物たちのインタビュー取材を実施した。まず、山岸が『カメラ毎日』誌上で度々取り上げ、現在でも第一線で活躍する写真家新正卓や川田喜久治、立木義浩などを訪ね、山岸との交流についてインタビュー取材を行った。

次に、山岸が『カメラ毎日』誌面で開始した公募「ALBUM」からデビューし、現在も活動を続ける下瀬信雄のように、これまで山岸との公私の交流が大きく記録されてこなかった写真家のインタビュー取材を実施した。さらに、山岸が度々利用していたフォトラボの元経営者で、山岸と直接フィルムの受け渡し等を担当していた人物に会い、同様の取材

を実施した。

この方法により、これまで詳しく記録されてこなかった山岸の人物像や性格などが徐々に明らかになってきた。山岸はとても繊細で几帳面な性格であった一方で、時に気性が荒く、周囲に怒鳴り散らすことなどもあったという。山岸の自死の数日前に言葉を交わした新正によれば、浮き沈みの激しい山岸の性格が、多くの写真家たちとの交流に大きな功績と功罪を与えていたようである。天皇とまで言われた彼の強いカリスマ性を強く支持する者もいれば、篠山紀信のように山岸から離れていった写真家も少なくなかったことが確認できた。

以上の調査を元に、飯沢耕太郎（1954 年～、写真評論家）やサンドラ・フィリップス（1945 年～、サンフランシスコ近代美術館シニアキュレーター）など、山岸の活動に大きく影響を受けた人物にも取材を実施し、山岸が現代の写真表現に与えた影響と彼の人物像との関係性を考察した。



取材時の様子：立木義浩（左）と報告者（右）

（3）撮り手としての山岸の調査研究

一次資料のうち、山岸が撮影した写真フィルムを調査したところ、旅の記録や妻享子の肖像、自身のセルフポートレートなど山岸にとって私的な対象が中心であった。しかしその中に、リチャード・アヴェドンの撮影現場など現代写真史にとって非常に重要な場面を記録したものが含まれていることが判った。

また、山岸旧蔵資料の中には、自動車会社や食品会社の広報誌など、一見すると写真史とは関連性の薄い書籍資料が含まれていることが判った。しかし、この資料について詳しく調査すると、カメラマンとして自身のキャリアをスタートした山岸が、これらの他社広報誌にカメラマンとしての仕事を残していることが判明した。毎日新聞社の社員だった山岸は兼業が禁止されていたためか、一時期は名前を変えて活動していた形跡があり、こうした情報については新たな発見となった。

山岸が撮り手として優れていたことは先行研究などでも報告されている。しかし、実際山岸が撮影した写真作品を一般に目にする機会は非常に少なく、今回の調査ではそれが明らかとなった。

山岸が撮影したポジフィルム①（1978 年 7 月フィルム現像）：アヴェドンの撮影現場と見られ、撮影地である「ENNIS GRADE SCHOOL」の文字が写り込んでいる。アヴェドンの代表作である写真集『In The American West』によれば、本作の原型が 1978 年 7 月 4 日にモンタナ州エニスで撮影された記録があることから、本フィルムはこの頃に撮影されたものと思われる。

山岸が撮影したポジフィルム②（1978 年 7 月フィルム現像）：モンタナ州エニスと思われる撮影現場で、アヴェドン、撮影モデル、撮影助手、享子らが写っている。

（4）まとめと今後の展望

本研究では、『カメラ毎日』と山岸の活動全体に関して広く調査した上で、日本写真史における山岸の活動の全体像を「Case Study on Shoji Yamagishi, Editor of the Japanese Photography Magazine *Camera Mainichi*」という論にまとめ、以下の共著に紹介した。

今後の展望として、本研究を基礎研究とし「山岸章二の業績検証：写真プロデューサー山岸章二の日本写真史における役割とその影響」（研究代表者：下西進　研究課題番号18K12259）において、本研究の発展と拡大を狙っている。特に、本研究で実施できなかった写真関係者への取材を早急にすすめ、山岸の活動や交友関係について深く探った上で、体系づけたオーラル・ヒストリー・アーカイブの作成等が考えられる。

また、本研究では山岸が撮り手としても秀逸な仕事を残していることが確認できたため、山岸の撮影した写真作品をまとめることも今後の展望として考えられる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔図書〕（計　１件）

下西 進

「Case Study on Shoji Yamagishi, Editor of the Japanese Photography Magazine *Camera Mainichi*」『The Routledge Companion to Photography and Visual Culture (Routledge Art History and Visual Studies Companions)』（主編：Moritz Neumüller、Routledge［Taylor & Francis Group、New York］、2018年）に所収

６．研究組織

(1)研究代表者

下西 進（SHIMONISHI, Susumu）

東京藝術大学・大学院美術研究科・大学院専門研究員

研究者番号：10760811